

藤沢の故マサコ・ムトーさん



病床からのぞく空は、80センチ×90センチの窓枠に切り取られていた。それは、移ろい続ける絵のように見えた。陽閉塞や肺水腫。90歳を前に

マサコ・ムトーさんは2006年に93歳で亡くなった。闘病中、藤沢市の自宅ベッド脇の窓から見える空をはがきに描き続けた。ことし5月に娘のヒロコ・ムトーさんが遺作展を開くと、来場者の共感を呼び、「雲日記」(海竜社)という本にまとまった。小さな体でめいっばい生きた「おばあちゃん」の思いは、きつこつだという。幸せを運ぶ、本になつてほしい。(佐藤 将人)

# 闘病支えた「雲日記」

## 寝たきり一筆運び続け



マサコ・ムトーさん

雲日記と名付けた。決して流麗とはいえないが、水彩でにじむタッチが穏やかで暖かい。「空が夕焼けで赤、ピンク、薄紫。色とりどりの絵の具のよう。子どもの着物にしたらいい

## 遺作展で反響、本に

「絵が描ける。なんて幸福なんじやろ」した数年の間に、病魔が次々襲った。歩くこともままならず、何度も生死の縁に立った。それでもリクライニングベッドを起し、筆を執った。全てをほのかに包むような淡い空。燃えるように赤い夕焼け。さんさんと輝く太陽。眠くて最後まで見られなかった、皆既月食。



窓から見える空模様をはがきの裏に描き続けた「雲日記」

き算ではなく、「今できること」をいつも重ねていった。69歳で片目の視力を失い、もう一方も緑内障を患った。片足が不自由だった。それでも70歳で絵画を始め、76歳で個展を開いた。闘病に打ち勝った後は、89歳から「豆紙人形」の制作を開始し、パリでの展示会まで成り功させた。

「何ができない」の引きと顔全体で笑って言った。「片目が見えなくても、片足は動く。それにほら、手が動く、指が動く、絵が描ける。なんて幸福なんじやろ」例えば病室で。一人きりの部屋の中で。そつとそばにあるような本であつてほしい。娘のヒロコさんは、そう願っている。

「病気で苦しいのに、自分の不運を呪ってもいいのに、なんなんだこの余裕はと」。娘のヒロコさんが振り返る。「足し算の生き方をする女性だった。「何ができない」の引きと顔全体で笑って言った。「片目が見えなくても、片足は動く。それにほら、手が動く、指が動く、絵が描ける。なんて幸福なんじやろ」例えば病室で。一人きりの部屋の中で。そつとそばにあるような本であつてほしい。娘のヒロコさんは、そう願っている。